

連載 38 『狸御殿』 まぼろしの和製オペレッタの源流をもとめて

木村恵吾の『狸御殿』シリーズは、和製のオペレッタ喜劇である。とくに有名なのが戦時下に公開された『歌ふ狸御殿』（1942年）、戦後は『春爛漫狸祭』（1948年）、『花くらべ狸御殿』（1949年）、『初春狸御殿』（1959年）とヒットを飛ばした。このほかにもマキノ正博、斎藤寅次郎らのリメイク『狸御殿』ものもある。『歌ふ狸御殿』は、戦争中、大東亜共栄圏各地に輸出され好評を博した。

シリーズには根強いファンがいて、鈴木清順監督の遺作『オペレッタ狸御殿』（2005年）は先行作品群への熱いオマージュである。鈴木清順『オペレッタ狸御殿』のキャストは狸姫が本作で日本映画初出演のチャン・ツイイー、相手役の雨千代がオダギリジョー。留学生の多い大学院の授業で紹介すると、歓声があがる。

残念なことにその木村恵吾最初の『狸御殿』（1939年）はフィルムが散逸したままである。今回『キネマ旬報』を通して、その面影にふれることにした。

意外にも、木村恵吾『狸御殿』には辛口批評が寄せられている。興行価値は「絶大。高山廣子の狸物と言ふ丈で客は来る」としながらも、次のように批判する。



『歌ふ狸御殿』（1942年）の高山廣子

之も狸物の一種であるが、木村恵吾の脚本は形を狸に借りての、一種の音楽喜劇的な効果（略）狸を扱った物としては「阿波狸合戦」程の諷刺や皮肉の味は見られなかつた（村上忠久『キネマ旬報』1939年11月11日号）

ここからわかることはすでに「狸物」という映画のサブジャンル(?)のようなものが成り立っていたらしいということ、そのヒロインとして「高山廣子」は人気者であったということ、先駆けとして『阿波狸合戦』があったということである。

『阿波狸合戦』については同1939年5月11日号にやはり村上忠久の記事がある。それによれば「新興の怪談物も今度は愈々狐に続く狸となつたが、八尋不二のシナリオは、流石に才人だけに思ひ切つた筋の組立て、狸仲間のいきさつを描いて、忍術物、股旅物といった様な種類のカクティルといふ物を作り出した」「新興自慢の怪談物、今度は狸映画である」という。こちら主演は高山廣子。八尋不二といえば大物脚本家で、戦後は内田吐夢監督『血槍富士』（1955年）など歴史に残る傑作のかたわら、『狸御殿』リメイク



『オペレッタ狸御殿』（2005年）

DVD（ジェネオンエンタテインメント）パッケージ
狸姫役のチャン・ツイイーと雨千代役のオダギリジョー

ブームに乗って、『阿波狸屋敷』（佐伯幸三監督、1952年）、『阿波おどり狸合戦』（加戸敏監督、1954年）なども書いている。『阿波狸合戦』の監督は寿々喜多呂九平^{すすきたろくへい}で、この人は阪妻こと阪東妻三郎を大スターにした功労者、阪妻プロダクション『雄呂血^{おろち}』（1925年）の脚本が一世一代の作である。『雄呂血』は現在でも活動弁士によって上映が続けられている。

さて、『阿波狸合戦』は、どうやら「怪談物」ジャンルに入れられていたらしい。その意味では、「狸物」「怪談物」を、和製オペレッタ・コメディへと、切断、再編した木村恵吾の仕事は、「怪談物」のパロディ化ともいえるのだろう。当初は音楽のおもしろさ、オペレッタ・コメディの笑いなどは批評家の間でさえ、あまり理解されていなかったのかもしれない。和製オペレッタの源流はまぼろしのフィルムとともに歴史の闇に眠っている。